

もっと広がる クスリの世界

薬の「色」にも注目

私たちが何げなく手に取る薬には、実は「色」にも大切な意味があります。薬の色は、見た目を良くするためだけのものではなく、飲み忘れや飲み間違いを防ぎ、安心して薬を使ってもらうための工夫の一つです。

薬をきちんと飲み切ることは簡単そう

服薬続けてもらう工夫

に見えて、実際には意外と難しいものです。忙しさや体調の変化の中で、「うっかり飲み忘れた」という経験がある方も多いのではないのでしょうか。そんな中、色の付いた薬は記憶に残りやすく、「この色の薬を飲む時間だ」と思い出すきっかけになります。はっきりした色を使うことが、服薬を続ける助けになる場合もあります。

また、色は飲み間違いを防ぐ役割も果たしています。複数の薬を服用している場合、形や色の違いが目印となり、特に高齢の方や視力が低下している方にとって大きな助けになります。「朝は白い錠

剤、夜は青いカプセル」と覚えることで、安心して薬を使えるようになります。

さらに、薬の色は味の印象にも影響します。ある調査では、黄色い薬は塩味、ピンクの薬は甘い味、青や白の薬は苦味を連想しやすいという結果が示されています。実際の成分とは関係なく、人は無意識のうちに色から味を想像してしまうのです。

特に子どもにとっては、「苦そう」というイメージが服薬の大きな壁になることもあり、色を工夫することで抵抗感を和らげられる可能性があります。ただし、こうした印象は育ってきた環境や食文化

によって左右される点には注意が必要でしょう。

どんな薬も、飲まなければ効果は得られません。薬の色は、治療を支えるためのささやかでありながら大切な工夫なのです。薬を無理なく続けてもらうためには、成分や効果だけでなく、「手に取りやすさ」や「親しみやすさ」も重要です。薬の色は、治療を続ける上で意外と大切な存在なのかもしれません。

(加藤 寛史・県病院薬剤師会常任理事)

◇お断り 次回は休刊日に伴い、3月3日(火)付に掲載します。